

他者・意味・実存

池上哲司

一

他者は我々にとってどの様な姿で現れるのであろうか。普通我々は毎日何百人となく他の人間を目にしているが、彼等を他者であるとは別段考えはしない。したがって、具体的に実在している人々が、そのまま具体的現実的な他者ということにはならない。しかし、他者が問題になるのは具体的な仕方であることに変わりはない。ということは、他者なるものを考えるとき、余りに具体性を欠いた観念的他者を考えるのでは不十分である、ということである。逆に言えば、日常の生のもっとも身近な場所こそ我々が他者を見落す盲点であると言える。すなわち、我々は他者を遠くに求め認めようとするが（これ自体決して悪いことではな

い）、重要なのは、それと同時に我々の近くにも同様に他者が存在していることを忘れてはならない、ということである。

他者とは字の如く私ならぬ他の者であって、私にとってあくまでも異物である。その異物が異物として現れてくるのは、我々が自己ならぬ他者に躓いてしたたかに体を打ったときである。それまで我々には異物が異物として見えなかつたわけで、自己にのみ関心が注がれていて他者の存在には注意もしていなかつたのである。自己への没入が中断されることを余儀なくされて、やっと我々は他者を他者として見つめることになる。したがって、他者が現れるには他の人間の具体的存在が必要であり、その具体的存在の活動する主要な場として我々の生が存在する。

具体的現実的な存在とは具体的實在的な存在を意味するものではない。「現実的な」とは、我々に生き生きと影響を及ぼすものであり、我々の生それ自体に容を加えるものである。したがって、過去の伝説の人の内にも確たる他者を我々は認めることもでき、このときその人は我々にとって具体的現実的であると言いうる。しかしだからといって、現在の我々のこの生を實在的に共にしている人々の重要性が薄れたわけでは決してない。なぜならば、現在實在している人々こそ、我々が最初に会おうであろう他者と考えられるからである。

生の中で他者に会おうことは難しい。というのも、他者を他者として見出すためには、我々は我々の目を我々自身から離して我々ならぬ異物としての他者に向けねばならないからである。通常このことはいとも簡単なことと考えられる。しかし事實は全く反対である。たとえば、我々は両親に向って「産んでくれとは頼まなかった」と一度は口にしたのではなからうか。しかし、そのとき我々は両親の悲しげな眼差を決して見ようとしなかつたはずだ。両親にとって我々がどの様に見えるかを決して考えようと

しなかつたはずだ。

なるほど我々各人はあくまで独自であり、各々違った人間であつて決して他者と完全に一体化できるものではない。しかし、自己から一旦目を離して、自己ならぬ者の視点から自己の背面を見ようとすることは可能はずである。少なくとも自己の視点だけを絶対化することは止めねばならない。だがこのことさえ実はきわめて難しい。このように我々の視点がどうしても自己中心性を免れえないのは、我々が神ならぬ有限な人間であることによる避けがたい制約であるとしても、我々はこの制約を越えて他者を他者として認めねばならない。実際我々がなんと言おうと我々の意に従ふことのない他者に、生の内では会ふことを我々は余儀なくされているのであり、そのような仕方では我々には我々に対して他者として現れてくるのである。

このことを我々の価値規準との関係から考えてみよう。我々が他者に躓き転倒するとは、我々の価値規準の有効性が否定されるという事態を示す。我々は我々の価値規準に従つて行為したにもかかわらず、その我々が置かれた状況にあつては、予め想定された価値はもたらされなかつたのである。つまり、我々自身の価値規準がそのまま、我々が

そこで生きている生の価値規準（もしそのようなものが可能であるとして）であるとの幻想の崩壊である。我々ならぬ者の総体として世界を認めるためへの第一歩である。また、価値規準とは、それに従って我々が我々の意味の世界を形成して行くものであるから、我々にとって意味あるものが他者にとって意味あるものと必ずしも一致しないという経験でもある。こういう仕方では我々は意味への関わり合いを通して他者に出会っている。

しかし、他者は単に我々の価値規準の無効性を我々に認めさせるだけでない。というのは、我々の価値規準はその正当性を他者によってこそ認められねばならないからである。価値規準は規準であることによって、私だけでない他の者によっても、妥当であると認められねばならない。そしてこの妥当性の承認要求は停止することがない。すなわち、我々の従っている価値規準がより包括的な範囲で有効とされることを我々はどうしても求めざるをえないのである。だからこそ、些細な好き嫌いをめぐっての争いから、信条をめぐる深刻な争いまで、我々は他者と衝突しつづけるのである。

このとき他者は我々に二重の意味をもって現れている。

つまり、他者は我々のこれまでの価値規準の有効性を否定しつつ、他方でその否定を通して、あるいは否定に一役買うことで、より有効な新しい価値規準へと我々を誘う。我々が躡くという形で出会うのは、我々の生の内に現れる具体的現実的な他者である。それと同時にこの他者は、我々の価値規準を最終的に承認してくれるはずの、いわば客観性を本質とする理念的他者ともいべきものの代理となつて現れているのである。

二

この他者の二重性は、意味における主観性と客観性という二重構造に対応している。すなわち、行為の主体として行為の意味とは、「私の」意味であると同時に「私」を越えた客観的価値の実現を担う意味としてある。したがって意味の二重性の前者の要素と対応して主体の生での具体的現実的な他者が現れ、他方後者の要素と対応していわば理念的他者が考えられることになる。

しかし客観的価値なるものがあるのだろうか。現実には我々は価値の相対性を認めざるをえない事態に直面しているのではないか。確かにそうである。我々はもはや普遍的

に妥当する価値秩序なるものを無条件に認めることはできない。あらゆるものが、最高の一点へと向けて関係づけられ、そこから評価が下されることはできないし、されてはならない。だが、そうであることよって価値が主観性のみを含むと考えられてはならないだろう。なぜなら、我々は価値の理念的客体としての客観性を否定できないと思われるからである。マックス・シェラーの考えでは、価値は理念的客体であって、いわば「青」といった色の様なものである。というのは、青い各々の事物の存在が無くなくても「青」という性質は変ることなく存在し続けるからである。このことは同様に「友情」に関しても言える。どんなに現実での友情が裏切りによって汚されようとも、友情それ自体は厳然とした価値を有しているというわけである。

もつとも、価値が事物とは別に理念的客体として存在しうることを認めるとしても、決して事物を離れて、主体を離れて価値が独立にそれだけで実在していると主張しているのではない。我々の志向性の対象として理念的に成立しているのである。現実的に成立するためには、価値を実現する主体の存在と當為とが必要とされることは言うまでも

ない。しかしなお疑問は残る。それは、主体の志向性の対象としての理念的客体といっても、志向性それ自体がすでにきわめて主観的なものではないかとの疑問である。この点にはきわめて難しい問題が含まれていると思われるが、ここではただ志向性というものが間主観的にある一程の客観性を含んだ形で成立しているということ指摘するにとどめておく。こう考えるならば、理念的客体としての価値も、間主観性としての客観性を認められるであろう。そしてその限りで、我々は価値観の多様性、価値の相対性という口実の下に恣意的に価値を措定することは不可能となる。

しかしなぜ我々は価値を主観的なものとのみ考え、価値をめぐって他者と衝突を繰り返すのであろうか。この間に完全に答えることは難しいであろう。しかし、我々はフランクと共に、我々人間は意味への意志という根本動機をもっていると言っているのではないだろうか。フランクは、彼の神経症治療の方法であるロゴセラピーの基礎概念を説明して以下のように言う。「ロゴセラピーによれば、人生におけるなんらかの意味を見つけようというこの努力が、人間における根本の動機づけとなる力である。」(Frankl,

Viktor E. *Man's Search for Meaning*, p. 98.) 我々人間は意味を求める存在であり、価値の実現を欲する存在である。人間が求むべき意味を失った場合、我々人間は危機に陥いる。このことは数々の例によって知られている。たとえば定年で退職した人は急激に老いこむことになる。もっと身近な例としては神経症の一種に数えられる日曜神経症がある。この日曜神経症とは、平日は忙しく働いているサラリーマンが休日になると自分ですべきことが見い出せないために陥いる神経症である。あるいは、第二次世界大戦中ナチの収容所では、休戦が今度のクリスマスに発表されるという噂が流れたが、実際には休戦は訪れず十二月二十五日を境にして急激にチフスによる死亡者が増加したという事実がある。これらは、人間がそのために生きるに値すると思われる一つの意味が、人間を生かしているということを示している。

しかし、単に人間は意味を求めるにすぎないのだろうか。先述したように、この求めるということ自体が間主観的に規定されているとはいえ、求めるということを強調すると、どうしても我々はその主観的側面のみを考えてしまうことになる。ここで我々は、意味と我々との関係を考え直すべ

きときに来ているのではないか。意味を求めるのは人間だという考えに固執しているからこそ、価値をめぐるこれまでの誤解も生じてきたのである。すなわち、価値があるか、ないかを決定するのは主体による自由によって委ねられていると考へ、いわば価値を一面的に主観化し、私物化してしまう。したがって我々は、我々の側から見ても価値実現のチャンスを見い出せぬときには、我々の生自体になんの意味も無いとして日々の生を投げ遣りに過してしまう。極端な場合には、自分で自分の生に終止符を打つといった事態にもなる。あるいは、自己の生の無意味さに耐えかねて、なんらかの意味を生に与えんとして手近かの思想とか流行の生き方に自己を没入させる。あるいは、生の無意味さこそが生の意味にほかならないと強弁し、恣意によって価値をもたぬものまで価値ありとする価値偽造にまで至る。

フランクは「生自身が人間に問をかけるのである。人間は問うべきでなく、むしろ人間は生によって問われているものであり、生に答えねばならない」(Frankl, V. E., *Ärztliche Seelsorge*, 1966, S. 72.) とする。人間が意味を問うのではなく、人間が意味を成就することを生から問われ

ているのである。こうして価値実現のチャンスが日々常に我々人間に投げかけられ与えられていることになる。したがって、人間の生が無意味であるかいなかは、主体によって決定されえず、むしろ逆に全く無意味であることが原理的に不可能となっているのである。つまり、生とはまさに我々が置かれている状況であることによって、状況の内で我々には常に意味を成就する可能性が開かれていることになる。生の状況の内で現れる他者との連関で言えば、理念的他者なるものによってその意味成就の可能性が我々に示されていると考えられる。なぜならば、我々の行為の意味がその承認によって最終的に確保される、理念的他者なるものがたとえ虚焦点の如き極であるとしても、それによって我々の意味の世界は決して閉塞することがなく常に開かれたものとしてあるからである。

三

では、我々が意味を問われていることは、生の内でのどのような姿をとって現れているのか。人々が毎日働きながらを生み出して行く過程に、我々は創造の価値を見い出すことができる。しかし、なにかを創造することのない者は

なんの価値をも実現できないのであろうか。そうとは考えられない。かりに創造の価値を実現できぬとしても、なんらかの体験を体験するという体験の価値を実現できる。たとえば、美しい風景を眺めるとか、美しい音楽を聴くとかいったことも一つの価値を実現している。それでは創造の価値も体験の価値も実現できない人にはなんの価値もないのであろうか。そんなことはない。なぜなら人間の前には第三の価値のカテゴリーが開かれているからである。その第三の価値とは、状況に対して主体が採る態度によって実現される価値、態度価値 (Einstellungswerte) である。

この価値は人間が人間として意識をもつ限り実現可能な価値である。というのは、ある状況に対して一つの態度を採ることは人間に与えられている自由によるもの以外でなく、この自由を行使することはひとえに自由の主体たる人間の責任にかかっているからである。なるほど人間は生物学的には遺伝によって、社会的には環境によって、心理学的には衝動によって制約されている。しかし以上の三つに完全に還元され尽くすものではない。したがって、我々は我々の採る態度というものをあの三つの制約のせいにすることはできず、あくまでも我々の自由に基づく我々の責任

によるものと考えざるをえない。ということとは、我々が人間である限り態度価値実現の機会に常に存在するのであり、いやおうなく態度価値実現という間に自己の責任によつて答えざるをえないことになる。

さらにしかし、人間としての意識もなく、単に植物的に生かされている人間にも価値の実現は可能なのであろうか。この問は安楽死の問題とも関係した難しい問題であるが、少なくともそういった人々が自分から価値を実現することは明らかに不可能である。しかし、だからといってその人々の存在が無価値であるとは決して言えない。なぜなら、彼等を愛する人々にとって彼等は独自の他の人々に劣らぬ重い価値を有するからである。したがって、人間にとっては意識するとしなないとに關係なく常に価値実現の可能性が開かれていることになる。

このことは死によつても解消されるものではない。普通我々は、生きているときにどんな価値を実現したところで死んでしまえばすべては無に帰すると考える。確かに我々の生は死によつてその両端を区切られた有限なものかもしれないが、有限だからといってどうして無価値なものと言えようか。逆に有限だからこそ価値があるのではないだろ

うか。もし我々の生が無限であるならば、我々はある行為を自分の好きなきにすることができ、したがってなにを行うかは全くの恣意によるしかないことになる。そういった生に対して我々は価値の実現を見出すことができなと思われる。そこは自由な世界ではなく、むしろ偶然に支配された死んだような均質の世界であるにちがいない。生が有限なものとして区切られているからこそ価値実現の一回性（すなわち、ある価値が実現される機会は大一回だけで、そのとき実現されなかつた価値は永久に実現されることがないということ）も生じるのであり、我々の生に意味が与えられることになる。死んでしまえばすべては同じといったように、死によつてすべてがはかなく流れ去ってしまうのであろうか。果して過去はただ過ぎ去つて今はもう無いものなのであろうか。決してそうではない。過去は過ぎ去つてしまったことによつて確実に現在も存在している。そしてその過去には誰も手を加えることはできない。過去は流れ過ぎ去つたものでなくて、我々各人の背後にしっかりと堆積しているものである。過去は無ではなくて我々の実現してきた価値の倉庫である。

このように常に我々に投げかけられている意味への間に

対して、我々はどのように答えているのであろうか。充足さるべき意味として我々に与えられた問に対しての我々の答は行為によってのみなされる。我々は数々の可能な行為の中からたった一つの行為を選択するのである。さらにその具体的行為を選択する我々自身の置かれている状況は、一回的な価値実現を我々に要求するきわめて具体的個別的なあり方をしている。つまり、その状況には具体的現実的な他者が共に立ち会っているのである。というのは、我々が価値実現の具体的個別的な要求に答える主体たるためには、我々ならぬ他者との出会いを通して自らの具体性個性を獲得していなければならないからである。したがって、価値実現の問が現実の生の内で我々に投げかけられるとき、それはすくなくとも具体的現実的な他者の媒介を通して我々に提示されることになる。いわば理念的他者性を内に含んだ具体的他者が、我々の具体的生の内に意味への問を携えてやってくるということができよう。確かに価値は理念的客体としての客観性をもつのであるが、その価値が実現されるためには主観性を帯びざるをえないのである。

価値は客観的でありながら主観的でもあらざるをえないとすると、一体価値とはどのようなものか。価値はそれだ

けで自存するのでもなく、逆に主体によって産み出されるのでもない。価値が価値として主体によって実現されるためには、主体と主体以外の現実的他者が必要とされる。すなわち、価値は一人の価値に向う主体の存在によって実現・現実化が可能となり、さらに主体にとって価値が価値として意味をもってくるのは他者性という軸に媒介されてのことである。我々はここで価値と意味との問題に出会っているのである。これまで価値と意味という言葉を区別なく使用してきたが、実は両者には微妙ながらも重要な違いが存在している。以下この点をめぐって再度価値と他者といった問題を考えてみる。

四

これまで常に問題となっていたのは、他者の二重性であり、価値の二重性であった。すなわち、他者は具体的現実的でありながら、同時に具体的他者を越える理念的他者性を帯びて我々に現れる。また、現在・此処での価値が問われているながら、同時にその底に価値の普遍妥当性が志向されているのである。しかし、この二重性は先述した如く志向性といった考え方によってある程度理解できると思われ

る。というのは、我々が当面している以上のなにかを常に志向しているがゆえに、我々は主観的と通常考えられているものの内に同時に客観性を見てしまっているからである。

だがこの志向されている客観性とは、主観から独立しているのか、それとも主観となんらかの形で関係しているのか、あるいは全く主観そのものが創り出したものか。すでに第三の立場については、志向性の形成が間主観的であることからその誤りが示された。第一の立場とは、主観抜きに志向対象の客観性が成立するというのではなく、志向される価値を理念的客体として事実的経験的条件から独立させてそれ自体として考察しようというものである。しかし、価値が理念的客体であるとしても、その形成は歴史の内になされたのであり、したがって価値について考えるときその歴史性を考える必要があるのではなからうか。ここで我々が選択を迫られているのは、価値の客観性を歴史を越えて認めるか、それとも歴史の内でのみ認めるかという二つの道である。いずれの道が正しいのか、残念ながら現在の我々は確信をもって答えることはできない。確かに、価値が我々の生において実現されるのも、さらに理念的客体

としての価値を我々が志向するのも歴史の内においてではあるが、ここから直ちに価値そのものの客観性が歴史の内に限られるということにはならない。逆に、価値の客観性が歴史を越えて永久不変に成立していると結論することもできないのである。

そこで我々はあの三つの内の第二の立場を採ることになる。つまり、価値の客観性が歴史を越えたものかどうかにについての決定は保留した上で、あくまで価値の実現という場面に定位するということである。というのは、価値の客観性がどのようなものであれ、歴史の内では価値が実現されるというそのこと自体の構造は歴史に全く依存していないと思われるからである。

価値の実現は一回的なものとして我々に要求されているが、その要求に答える者はそこに自らの独自性を刻印する。こうして生から問われた意味が充足される。客観的な価値は、主体の独自性を通して実現されることによって意味となる。つまり、価値が意味へと転換する地点に、生からの問に答える者の独自性の契機を考えるわけである。価値実現の一回性と主体の独自性という二契機に我々は注目せねばならない。価値が現実化して意味となるとき、一回性の

契機は、我々がなすべき行為に対応しそれを基礎づける価値領域を限定する。価値を意味へと転換させる独自性の契機は、限定された価値領域に対応する数々の行為の内からただ一つの行為を選択する。換言するならば、価値実現の一回性は、今・此処でしか実現されない価値領域を我々に開き、独自性は価値を意味とする際の主体である実存の代替不可能性として、我々に選択すべき行為を指し示す。たとえば、医者甲の母親が重病になったとき、甲は勤めている病院の患者に付き添うか自分の母親に付き添うかの選択を前にして当然母親に付き添うことを選ぶだろう。なぜなら、病院の患者の付き添いは他の医師でも可能であろうが、甲の母親の付き添いは甲以外によつては充たされないからである。

ここで独自性とは主体としての実存の代替不可能性として考えられているわけであるが、果してこの独自性が独り合点のものではない保証はどこに求められるのか。というのは、ある人にとつて意味があることも、別の人にとつては全く無意味でしかない場合もあるからである。もつともな疑問である。元来意味とは主体にとつて問題となり、この点で価値の一般性と区別されたはずであった。しかし主

体の独自性は決して独り合点ではない。独自性は主体と他者との関係の場としての生の内ではじめて明らかになるものであった。主体が単に独りであるからといって独自性が生れるものではない。逆に他者の側からのみ我々の代替不可能性が成立してくるとも言えよう。要するに、意味とはあくまで主体にとつての意味であると共に、その意味が成立してくるためには自己ならぬ他者を必要とする。この独自性・代替不可能性は、我々実存の根源的契機であり、實在的他者によつて充実されるとはいえ常に自己ならぬ者としての他者への志向性を有する。だからこそ意味が我々に現れてくるとき、我々は具体的現実的他者と同時に理念的他者性をも志向するのである、志向せざるをえないのである。

代替不可能性という軸によつて、主体にとつての意味は主体によつて意味ありとされるものではないことが明らかになる。これは、主体の価値実現・有意味性の可能性を大幅に、いや無限に拡大したことになる。主体がたとえどんなに自己に絶望したところでも変えることはなく、その主体は常に代替不可能性を有する。主体としての実存は絶対的に有意味なのである。したがって、主体としての実存

が有意味である限り、主体はなんらかの価値を意味として実現して行かざるをえず、そこにこそ実存の責任が存している。

他方、価値の意味化・価値の実現での独自性という軸はもう一つのことを明らかにするだろう。すなわち、独自性によって主体としての実存が絶対的に有意味となるとして、実存の独自性とはそもそもなにかということである。つまり、どうしても代替できないのは実存におけるなにかということである。あるいは実存を実存たらしめているのはなにかという点である。独自性というものが他者との関係に存することから考えると、他者が主体としての実存に代替不可能性を見るのは、主体の身体的な面だけでも、心的な面だけでも、精神的な面だけでもない。それはあくまでも一つの实存としての主体の全体に対してである。にもかかわらず、主体の精神的な面が欠落しては、その主体は実存と呼ばれることはできないであろう。そのような意味で、代替不可能性は人格と人格との関係においてのみ十全に成立しうるのである。もつともここで人格をなんらかの实体と考えているわけではなく、実存の精神性が前面に出ている場合を指しているにすぎない。以上のことか

ら、主体としての実存が絶対的に有意味であるということとは、実存の精神性をめぐる代替不可能性によって保証されていると考えられる。

ここで再びフランクルの創造価値、体験価値、態度価値という考えを思い出すならば、態度価値こそが我々の代替不可能性をもつともはつきりと示すものであろう。なぜならば、避けることのできない状況に対してどのような態度を採るかによって実現される価値がこの態度価値であり、この「避けることのできない」とは正に代替不可能性にはかならないからである。さらに、「ある状況に対して態度を採る」とは、実存の精神性によってはじめて可能となることである。かくして我々は、態度価値によってどんな場合にも実存となることを要求されているのである。